日本「アジア英語」学会(JAFAE)

ニューズレター

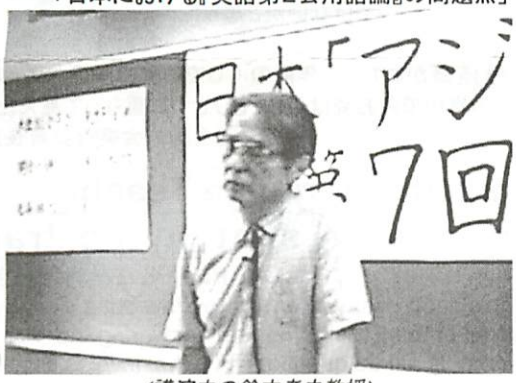
No.7 (September 2000)

第７回全国大会、青山学院大学で開催

日時: 2000年7月15日(土)
10:00～17:45
会場: 青山学院大学

第７回全国大会プログラム

9:30 受付
大会総合司会 矢野安剛（早稲田大学）
10:00 開会の辞: 木村松雄（青山学院大学）
会長挨拶: 本名信行（青山学院大学）
10:10－11:40 特別講演:
鈴木孝夫（慶応大学名誉教授）
「日本における『英語第２公用語論』の問題点」



〈講演中の鈴木孝夫教授〉

11:40 - 12:00 会員総会
(12:00－13:30 昼食休憩)
13:30－15:30 研究発表
*司会:*津田早苗（東海学園大学）
1.「シンガポールにおける'Speak Good English Campaign' の概況」
江田優子(青山学院大学)
2.「シンガポールと日本での英語落語の効果と受け入れ－英語教育の観点から」
大島希巳江(青山学院大学)
3.「東アジアの英語使用についての民族的・心理的優位性の原理的検討－歴史的視座から見た日韓の英語教育の針路」
名波彰（兵庫県立尼崎稲園高等学校）
4.「コミュニケーションパートナーとしてのアジア人留学生」
杉野俊子(防衛大学校)
(15:30—15:45 休憩)
15:45－17:45 シンポジウム
テーマ:日本英語の統計的分析
*司会:*田中弥生(フェリス女学院大学)
発題:
猿橋順子(青山学院大学)
「ニホン英語に関する先行研究の整理と評価」
木下みゆき
三宅ひろ子(青山学院大学)
「語順、主述、時制の統計的分析」
久保田信一(明海大学)
「冠詞の正誤に関する一考察」
富田晴雄(青山学院大学)
「関係詞節の特徴」

閉会の辞: 大島真(実践女子大学)
18:00 懇親会（於 青学会館）

大会をふりかえって

大島 眞(実践女子大学)

7月15日(土)、真夏日に日本「アジア英語」学会第7回全国大会が青山学院大学で開催された。 会場は立見のでるほどの盛況であった。

鈴木先生の大所高所からのご講演のあと、午後からは研究発表とシンポジウムがあった。研究発表は4つあり、前半の2つはシンガポールにかかわる発表で、「シンガポールにおける'Speak Good English Campaign'の概況」(江田優子氏)と「シンガポールと日本の英語落語の効果と受け入れ－英語教育の観点から」(大島希巳江氏)であった。

江田氏は昨年8月14日のリークアンユー上級相による Singlish批判のスピーチをきっかけに、クレオール化する英語でなく、標準英語を話せという政府主導のキャンペーンがはじまったことを紹介した。発表後の質疑応答の時間に、なぜ今このようなキャンペーンがはじまったのかについてフロアからさまざまな意見が出た。

大島氏は、文化と発想の違いを落語という笑いの中で伝えると受け入れられてしまうこと、 日本人の英語はなかなかよいではないかということ、Singlish というのはシンガポール人のアイデンティティーとなってきていて、それは

政府の当初の考えでは英語を第一言語として異民族間の中立的な言語媒介手段にするという考えと全く異なってしまっているのが皮肉なことである、などの発表をした。

後半の2つの発表は、「東アジアの英語使用についての民族的・心理的優位性の原理的検討」(名波彰氏)と「コミュニケーションパートナーとしてのアジア人留学生」(杉野俊子氏)であった。

アジア各国人のお互いの差別感は歴史の流れの中で形成されたものであるが、名波氏(兵庫県立尼崎稲園高等学校)も、杉野氏(防衛大学校)も、生徒・学生が若い年齢にもかかわらずアジア人の英語を受けつけない現実を報告し、英語のバリエーションを許容する態度をはぐくむ指導の必要性を語った。

シンポジウムは「ニホン英語の統計的分析」をテーマに、インターネット上の106のホームページから約36,000語を資料としてとり上げ、全体(猿橋順子氏)、冠詞(久保田信一氏)、語順・主述・時制(木下みゆき氏・三宅ひろ子氏)、関係詞節(富田晴雄氏)についての誤答分析の報告がおこなわれた。各発題後の質疑応答の時間に、フロアから「ニホン英語」の定義についての疑問が出された。筆者は、「ニホン英語」より「ホームページに見られる日本人英語」のように限定する方がよかったのではないかと思った。

ともかく最後まで盛り上がった会であった。

<シンポジウムの様子>

鈴木孝夫先生をお迎えして

木村松雄(青山学院大学)

私が鈴木孝夫先生のお話を最初に伺ったのは、およそ25年前に溯る。当時はまだ社会言語学という用語と言語社会学という用語の学問的境界線が明確でなかったように記憶している。英語の教師になりたての私は、言語と人間の生き方を乖離して成り立つかのような当時の言語教育観ないしは教授法観に一種の違和感を既に感じ始めていた。悶々とした気持ちを払拭するため、縋るような想いで参加したのが、F. C. C. パン先生(ICU)が主催する「ICU夏季言語学講座」であった。イギリスのピーター・トラッギル氏をはじめ、時代をリードする国内外の第1線級の講師がひしめき合っていたが、わけても鈴木孝夫先生の存在は異彩を放っていて、他の講師を圧倒していた感がある。当時「ことばと文化」の著者として既に多くの言語学者や言語教育関係者に多大な影響を与えていらしたが、個人的にはなぜ日本の文化の中から、このような鋭角的でありながら多面的かつ包括的なお考えを持つ方が出現されたのかが分からなかった。

今般、鈴木先生を青山にお迎えし、特別講演を拝聴して、その疑問が解けた。それは、先生が講演の中でも強調しておられた、真の教養を備え、なお尽きることのない知的好奇心を持ち続けていらっしゃる方だからではないか。

「日本における『英語第2公用語論』の問題点」と題しての御講演であったが、最も印象に残ったのは、「先進国には共通の特徴がある。経済力と軍事力と言語力である。この50年経済力だけで先進国の仲間入りをしたのは日本でけであり奇跡的でさえある。しかしこの経済力が信頼に値しないものになった今、日本(人)が備えなければならないのは真の言語力である」という内容のお話である。

我々はとかく「何のため」という目的を論ずることなく、言葉を研究の対象としたり、方法論を論じたりしがちである。学問研究の成果がどこに結びついていくのか、いくべきかを忘れてしまうことがあってはならないと思う。私の専門は英語教育方法論であるが、先生のおっしゃる「言語力」が真の形となるためには、21世紀を担う英語学習者自らが、目的に沿った学習方略を開発していく自立型の学習者に成長していかねばならず、そうでなければ国際間コミュニケーション能力が育つことはまず有り得ず、よって、自立的学習を支援し育てる教育の枠組みこそが今後必要になってくるのではないかと思った。

当日参集した200名を超える聴衆に、鈴木先生は新たなる「種」を蒔かれた。25年前のICUでの御講演のお姿と25年後の青山でのお姿は奇しくもひとつに重なって見えた。

(第7回全国大会実行委員長)

English Language Teaching in Vietnam: A sketchy portrait

Thai Dui Bao (名古屋商科大学)

This short essay attempts to draw out a sketchy portrait of the ELT in Vietnam answering the commonly asked question: "At what level is English taught?"

Foreign language education is now compulsory in most levels of training in Vietnam. Students are free to choose one among such required major foreign languages taught at schools as English, French, Russian, and Chinese.

Over the last decade, in formal sectors, at secondary level (grades 6-12), English as a Foreign Language (EFL) is a dominant foreign language taken, in comparison with French and Russian which used to be the most popular ones due to historical reasons. The English study program for this level has been designed and totally controlled by the Ministry of Education and Training (MOET). In the few years, there has been a pilot program offering English as an optional subject for the kids in the latter years of their

primary education (grades 3-5). The minimal weekly contact hours for these levels are 3 and 2 for secondary and primary levels, respectively.

At tertiary level, foreign language studies are also required. EFL courses for non-major students are offered in both divisions throughout the four years' schooling. The total length of the EFL courses taught at this level is 300 and 120-180 contact hours for lower and upper divisions, respectively.

Unlike the general English programs taught at previous levels, English courses at tertiary level are, by definition, mainly those for Academic Purposes and for Specific Purposes, which are much related to the content areas in which the students are majored. Here the curricula have been decided by individual institutions as authorized by MOET.

At graduate level, most institutions require graduate students to take English as their first or second foreign language courses. The minimal number contact hours required is 300. Testing and assessment have now become topical issues of great concern shared at different levels and institutions. However, MOET has step by step tried to standardize English Language Tests on a national scale. Apart from institutional standards and those set up by MOET like A, B, C, or D language competency levels, some foreign ones have also been adopted namely, TOEFL, IELTS, or Proficiency Michigan Tests, etc.

Besides, what is worth mentioning is that it is the teaching of English in informal sectors that add more colors to the ELT scenario in the country. Competitions in training quality, diversity in delivery modes of informal sectors who have been driven by the market demands, have significantly helped change the face of ELT in most urban areas. Empowering students with a high level of English competency required in their career paths has always been their goals and main reasons of businesses.

The English language learning has also been soared up with a remarkable number of enrollments in English major programs at tertiary level, both in full-time and part-time forms of training. While there has been a shortage of ELTers, especially for rural and mountainous areas, the process of standardization and retraining of the existing ELTers at various levels has become more urgent than before. The qualifications for ELTers are: B.A in English plus teaching credentials (in terms of relevant insights into psychology and methodology) for primary and secondary levels, master degree for tertiary level, and Ph.D. for graduate one.

編集委員会から

モノグラフシリーズ刊行のお知らせ

7月15日の理事会でモノグラフシリーズの刊行が検討され、学会の発展と充実、並びに会員の研究奨励を目的とし、積極的にモノグラフの刊行を押し進めて行くことが決定されました。下記の要領で、年数回の割合での刊行を予定しております。

○刊行希望者は希望の旨を編集委員会に伝え、コピー3部を提出する。
○編集委員会はレフリーに査読を依頼し採択の可否を決定する。
○採択された場合は、版下を著者の責任で作成する。
○モノグラフの体裁は学会紀要『アジア英語研究』のそれに原則準ずる。
○アブストラクトの要、不要は著者の判断とする。
○出版に関する費用は著者の負担とする。
○販価を付けて販売する。
○売り上げ収入は著者と学会で折半する。

費用のおおよその目安は以下のとおりです。

a) 版下だけ渡して印刷、製本等全てを業者に任せる場合：一部200円～240円位（印刷部数による）
b) 本文は著者が印刷、表紙の印刷と製本を依頼する場合：一部50円（本文の紙代を含まず）＊ただし、「帳合い」を著者が行う。
c) 製本だけ依頼する場合：一部45円（表紙と本文の紙代を含まず）＊ただし、「帳合い」を著者が行う。

詳細は編集委員会までお問い合わせください
（FAX：052-774-3677　または
E-mail: yskw@clc.hyper.chubu.ac.jp）。

会員による新刊書

Planning Language, Planning Inequality
James W. Tollefson 著　杉野俊子編著
（有）春風社　全86ページ　1,600円
ISBN 4-921146-10-1C3082

『他文化共生社会への展望』
徐龍達、遠山淳、橋内武編著
日本評論社　xi＋294pp
ISBM 4-535-58278-5

事務局から

1．次大会について

先の全国大会時でもお伝えいたしましたが、第8回全国大会は、名古屋市の中京大学にて12月16日（土）におこないます。大会実行委員長は、本学会会員で、同大学の境賛三氏です。

2．会費について

1999年度分年会費を未納の会員は、できるだけ早くお

支払いください。本年度分までの年会費は、一般会員が3,000円、学生会員が2,000円、法人会員が30,000円です。なお、第7回全国大会における会員総会で、来年度(2001年度)以降の年会費が一般会員5,000円、学生会員が3,000円に改訂することが決定されました。法人会員の年会費は30,000円ですえおきです。年会費は、夏と冬の全国大会の時にお支払いいただければ事務処理上非常に助かりますが、やむを得ず振り込みをされる方は、次の口座に振り込んでください。振り込みの際は、会費の年度、一般・学生・法人の会員ステータスの記入をお願いします。振込先は、郵便振替　00280－8－3239です。

3. ホームページについて

学会が開設しているホームページのアドレスが変わりました。新しいURLは<http://www1.linkclub.or.jp/~jafae>です。ホームページでは、日本語と英語で、学会の基本方針、会則、入会方法、理事名簿、紀要投稿規定、研究発表応募規定、紀要目次、ニューズレターのバックナンバーなどの情報を提供しています。ぜひ一度、見てください。

事務局では、多くの会員の方にホームページを積極的、かつ有効に活用していただき、さらに内容や編集方法についてのご意見をお寄せいただきたいと考えています。

4. 第1回海外研修

本学会主催の第1回海外研修は、9月1日から9日の期間に南インドのハイダラバードの中央英語外国語研究所(Central Institute of English and Foreign Languages, Hyderabad)にておこなわれます。

第８回全国大会研究発表者募集

第8回全国大会は、2000年12月16日(土)に名古屋市の中京大学にて開催いたします。研究発表を希望される方(会員に限る)は、要旨(日・英どちらか)をA4用紙1枚にまとめて、10月13(金)必着で、電子メール、FAXまたは郵送にて、事務局までお送り下さい。

CALL FOR PAPERS for the 8th National Conference at Chukyo University in Nagoya

The Conference Committee invites submission of abstracts for papers. Submission is by e-mail, fax or mail. Abstracts for papers should be no more than 250 words in length. The deadline is Friday, October 13, 2000. Please send it to the JAFAE Secretariat (address below).

他学会からのお知らせ

The 5th English in South East Asia Conference (5ESEA)

The 5th English in South East Asia Conference (5ESEA) will be held at Curtin University of Technology (Bentley Campus), Perth, Western Australia, from 6-8 December 2000.

Contact details
Academic enquiries:
kirkpata@spectrum.curtin.edu.au
General enquiries:
mulligad@spectrum.curtin.edu.au
Website:
http://hits.curtin.edu.au/~esea

AN INTERNATIONAL CONGRESS ON WORLD LANGUAGES IN MULTILINGUAL CONTEXTS

January 3-7, 2001, CIEFL, Hyderabad, India

Congress organizer:
Central Institute of English and Foreign Languages (CIEFL) Alumni Association, Hyderabad, India. For further information, please contact Prof. Makhan Lal Tickoo, President, International Congress, CIEFL, Hyderabad 500 007, India
Telephone: +91-40-701 8131
Ext Fax: +91-40-701 8402
E-mail: congress@ciefl.ernet.in

<編集後記>

本号では、ベトナムの英語教育の第一人者であるBao教授にベトナムの英語教育を紹介するエッセーを執筆していただきました。ベトナムの英語教育に関する情報は多くないので、参考になると思います。

会員のみなさまにも、ニューズレターを有意義な内容にし、また、有効に活用していただくため、どんどん情報や記事を事務局までお寄せください。特に、アジアの国（地域）やアジアの英語に関する投稿を歓迎します。

2000年9月10日発行
編集・発行　日本「アジア英語」学会
代　表　者　本名信行
編　集　長　榎木薗鉄也
発　　行　(有)タナカ企画
事　務　局　〒182-8525
東京都調布市緑ヶ丘1－25
白百合女子大学
田嶋宏子研究室内
FAX: 03-3326-4550
E-mail: tina2@gol.com
*学会ホームページ：*http://www1.linkclub.or.jp/~jafae
年会費振込先：郵便振替　００２８０－８－３２３９

《 JAFAE Secretariat 》
Professor Hiroko Tina Tajima
Department of English, Shirayuri College
1-25 Midorigaoka, Chofu-shi, Tokyo 182-8525
FAX: 03-3326-4550
E-mail: tina2@gol.com
JAFAE's homepage: http://www1.linkclub.or.jp/~jafae
JAFAE's postal transfer account number
００２８０－８－３２３９